

諦めるために逃げたのに、
お腹の子ごと溺愛されています
～イタリアでホテル王に見初められた夜～

Adria

目次

諦めるために逃げたのに、
お腹の子ごと溺愛されています
〜イタリアでホテル王に見初められた夜〜

書き下ろし番外編

永遠の愛を約束しよう

諦めるために逃げたのに、

お腹の子ごと溺愛されています

イタリアでホテル王に見初められた夜々

プロローグ

「えーっと、搭乗ゲートは……」

私はイタリア旅行に行くために、自分が乗る飛行機のゲートを探した。

保安検査と出国検査を無事に通過できたものの、初の一人旅は不安のほうが大い。

「やっぱり夏帆を誘えば良かったかな」

不意に出た弱音にハツとして、首を横に振る。

ダメよ、美奈。海外に行って一皮剥けた自分になるのよ！

「そうよ、あんな男忘れてやるんだから」

搭乗ゲートを見ながら、恨み言のように呟く。

そう。忘れてやるんだから……

——パアアーン！

呆然と立ち尽くしていると、部屋の中に小気味よい音が響いてハツとする。親友の夏帆が、ベッドの中で見知らぬ女という私の恋人——稔の横つ面を思いっきり引つ叩いたようだ。

今日は稔とデートの約束をしていた。が、昨日からずっと連絡が取れなかった。電話に出てくれないし、メッセージアプリに既読もつかない。嫌な予感ばかりが脳裏をよぎって、とうとう我慢ができなくなり夏帆に泣きつくと、稔の部屋まで一緒に様子を見にいこうと言ってくれたのだ。そして来てみれば、案の定彼は見知らぬ女と裸で寝ていた。最近、お互い仕事が忙しくて会えていなかったから、久しぶりのデートをすごく楽しみにしていたのに。それなのに、また浮気をしていたなんて……

心の中にゆっくりと絶望が広がっていく。

「夏帆……。もういい。もういいわ」

「何を言ってるのよ、美奈！ あんたも殴ってやればいいわ、こんな男」

私以上に憤慨している親友の手を引く張る。稔の隣では、裸の女が布団で体を隠しながら口元を手で覆って驚いていた。私とは違う明るい茶色の巻き髪のととても綺麗な、そして派手な女性。彼はこういう女性が好みだったのかと、ほんやり見つめた。

彼の部屋で浮気相手とご対面なんて情けなさすぎて、殴る気にもなれない。いっそ笑

い飛ばしてもすればいいのだろうか。

それに、稔の浮気は何もこれが初めてじゃない。付き合って二年。何度裏切られたか……。そのたびに彼は「魔が差したんだ」と言って頭を下げるのだ。

夏帆は稔の悪癖を知っていて、それでも私が不安にならないようにずっと励ましてくれていた。今日だって「きつと大丈夫よ。風邪で倒れているだけかも。ほら、様子見に行つてあげようよ」と言つて、なかなか勇氣の出ない私についてきてくれたのだ。そんな優しい彼女に手まで上げさせたのだ。ここで稔を許したら女が廢るといふもの。

「こんな男、殴る価値もないわよ……」

二人をキッと睨みつける。

言いたいことは山程あるが、きつとそれをぶつけたら泣いてしまうだろう。そんなの浮気相手の手に覆われた唇が驚きから嘲りに変わるだけだ。

それだけは……それだけは嫌だ。

言葉と一緒にこぼれてしまふような涙を呑み込んで、唇をキュッと引き締めた。すると、稔は悪びれもせずにはベッドから下りて近づいてくる。私たちに言い逃れのできない現場を見られたことも、夏帆にぶたれたこともまったく気にしていないのだろう。稔はまた私が許すと思っているかのように笑っている。そして両手を合わせて謝ってきた。

「美奈、ごめんな。彼女、すげえ積極的でさ。次こそはもう絶対にしないから……!」

自分のしたことを微塵も悪いと思っていない——私を軽んじているのが分かる彼の態度に嘆息した。

——私、何でこんな人を好きになったんだろう……

呆れた目で稔を見つめると、小首を傾げて私を見つめ返してくる。その表情が何とも言えないくらい苛立ちを誘った。

きつと彼は、私が「もうしないだね」と言つたら、抱き締めてくるんだろう。そして「俺が本当に好きなのは美奈なんだ。だから、仲直りしよう」と言うのだ。そんなやり取りはこの二年でやり尽くした。毎度毎度、同じことの繰り返し。反省もしないし、隠す気もない。

正直なところ、こんなことを繰り返されても変わらずに好きでいられるような忍耐力は持ち合わせていない。稔への恋心なんて、とうに色褪せている。残っているのは過去の思い出と情だけだ。

そんな不毛な感情とも今日でお別れよ。

私は手を伸ばして私に触ろうとしてくる稔の手を払いのけて、きつい眼差しで睨みつけた。

「もう稔とは別れるわ! あなたなんて嫌い!」

そう言い放つと、隣にいた夏帆が手を叩いて「よく言つたわ」と嬉しそうな声を上げる。

稔は私の拒絶を予想もしていなかったのだらう。ただひたすらに呆然としている。私はその場に立ち尽くす稔に彼の部屋の合鍵を突き返した。すると、受け取ってもらえなかった鍵がガチャンと派手な音を立てて床に落ちる。

「もういらないうから返すわ。あと、この部屋にある私のものはすべて処分しておいて」

「え？ 美奈？ マジで言ってる？」

「当たり前よ。こんなこと冗談では言えないわ。さようなら。二度と私の前に顔を見せないで」

私がそう言うのと、稔の顔がみるみるうちに蒼白になっていく。私はそんな彼の顔を瞥（いち）して、夏帆の手を引き、もう今後訪れることもないであろう部屋を飛び出した。

「ふっ、うう……ひっ、く」

彼の部屋を飛び出した途端、涙が止めどなくあふれてくる。すると、夏帆が抱き締めてくれた。

「美奈。あなたはとても素敵な女性よ。あんな節操なしにはもったいないわ。だから、これで良かったのよ。今日はすごく頑張ったね」

「ごめんなさっ……、ううん、ありがとう」

私は慰めてくれる夏帆と手を繋ぎながら、稔のマンションをあとにした。稔が好きだ

と言った長い黒髪が、涙の止まらない私の頬に纏（まと）わりつく。

「髪、染めようかな……」

あの女性（ひと）はとても明るい茶髪だった。稔に未練があるわけではないが、気分転換に茶髪にしてみてもいい気がしたのだ。何より彼が好きだと言った黒髪のままでいたくなかった。

「気分転換になっていいんじゃない？ 何なら、ベタだけ髪も切っちゃえば？ 今、

腰くらいまであるし……」

「そうね。最近この長さで黒髪ストレートはちょっと重く感じてると思っていたの。夏帆と同じ焦げ茶にして、胸くらいまで切ろうかなあ」

「嫌だ。私のは焦げ茶じゃなくココアブラウンよ」

「……何が違うの？」

焦げ茶とココアブラウンの違いが分からず首を傾げる。いつのまにか涙は止まっていた。

「詳しいことは美容師さんに相談すればいいわ。ほら、予約入れて」

夏帆がそう急かすから、私はスマートフォンで、私たちの行きつけのヘアサロンの予約を取った。

「わあ！ すごい！」

「こんなに短くなったの初めてだし、やっぱり雰囲気変わるね。うん、とてもよく似合ってる」

「ありがとうございます」

鏡の前で夏帆の言うココアブラウン色になった髪を見つめる。胸くらいまでの長さになったストレートの髪がふわりと揺れた。

長すぎた髪をばつさり切って、髪に色を入れたのは正解だった。髪も心も、とても軽くなる。

「でも、本当に良かったよ。正直、すごく心配してたんだ。別れて正解だね。美奈ちゃん、明るい子だから、すぐにいい人が見つかるよ」

「そうでしょうか……」

「うん。気分転換に旅行でも行ってみたら？ もうすぐお盆休みなんだよね？ 新しい出会いがあるかもしれないよ」

そう言ってウインクした美容師のいちのせ一ノ瀬さんの背中を叩く。

「もう。そんな簡単に出会いは落ちてませんよ。それに、恋はしばらくいいかなあ。今は一人の時間を楽しみたいです」

穂と付き合っている時は、彼の部屋の掃除をしなければならなかった。それに毎日お弁当を作ってほしいと頼まれていたので、せっせと早起きしては彼の会社の近くで待ち合わせして渡していたのだ。それがなくなっただけでも、すごく楽だ。もう早起きする必要がないし、彼の部屋の掃除をする必要もない。その時間を使って、何かを始めてみてもいいかもしれない。

「それなら尚更、旅行はおすすめだよ。いつもと違う場所で羽を伸ばしたら、きっと嫌なことも全部どこかに飛んでいくよ」

「ありがとうございます。そうします」

「目一杯楽しんで」

微笑んでペコリと頭を下げると、一ノ瀬さんが微笑み返してくれる。

私はその足で、ガイドブックを探すために本屋へ向かった。

うーん。せっかく行くなら海外がいいかしら。

日本との違いをこの目で見れば、一気に視野が広がり今後の自分を変えるきっかけになるかもしれない。たくさん国のガイドブックが並ぶ棚を見ながら、私はまだ見ぬ地へ思いを馳はせた。

「やっぱりイタリアにしようかしら。イタリア語なら少し分かるし……」
昔、テレビで見た旅番組で憧れてから、いつかイタリアに行ってみたいと思っていた。イタリア語教室に通って、旅行に行けるくらいの語学力は身につけたのだが、結局ずっと行けないままだった。

旅行一つでも自分で行動しないとダメなのよね。行きたいと思っていても、考えているだけでは日々はあつという間に過ぎていく。イタリアに行きたいなら、行動しなければならぬのだ。

「どこにしようかな。イタリアは見所がいっぱいあって悩む……。うーん、あ！ このマリア様の写真綺麗！ 自分の目で見てみたいかも」

私はガイドブックに掲載されているミラノ大聖堂のシンボル——黄金のマリア像に目を奪われた。

——この時の私はマリア像への一目惚れで選んだ旅先で、まさかあんなことが起こるなんて思いもしなかった……

1

「ここがミラノ……」

失恋の痛みもどこかに飛んでいきそうな気分が上がる可愛らしいワンピースに身を包み、私は感動に打ち震えながらミラノ・マルペンサ空港に降り立った。そして胸一杯に思いつきりミラノの空気を吸い込む。

ふふ。一人での旅行は不安だったけど、無事に着いて良かったわ。心配性な親友が海外旅行時の注意点をあれこれと云ってくるせいで不安だったが、問題なく入国審査も終えられたし、先行きは明るい。私はほくそ笑みながら、電車とバスの料金を調べるためにスマートフォンを取り出して検索ページを開いた。一人旅は何かあるか分からないし、出来る限り費用は抑えたい。

ホテルまでの行き方は……えっと、あ！ バスのほうが安い！

私はバスにしようと決め、視線を上のように向ける。そしてバス乗り場の場所を案内表示で確認した。

「税関を出て左……」

案内表示を見ながら、一人でブツブツ呟きながら進む。すると、かなり歩いたなと思いはじめた頃にチケット売り場が見えてきた。その瞬間、並んでいるたくさんの人を見て思わずげんなりする。

「やっちゃった。こんなことなら事前に予約購入しておけば良かった……っきゃあ！」

トホホと肩を落とし列に並ぼうとすると、目の前で突然おばあさんが転んだ。
「大丈夫ですか？」

荷物を放り出して駆け寄り、たどたどしいイタリア語で話しかける。おばあさんは小さく頷いて、「ありがとう」と言いながら笑ってくれた。その様子を見て、ホッと息を吐く良かった。怪我はしていないようね。

ニコツと微笑み、一緒に鞆からこぼれ落ちてしまった荷物を拾う。よろけるおばあさんを支え立ち上がると、彼女が申し訳なさそうに地図を見せてきた。

「迷惑ばかりかけてごめんね……。このターミナルに行きたいんだけど、どうやって行けばいいか分かる？」

「いえいえ。迷惑だなんてそんなことはありません。困った時はお互い様ですから。えっと、それは……」

あ、ここさっき私がいたターミナルだ。

空港内の地図を見せてもらいながら歩いてきた道を思い出し、慣れないイタリア語でなんとか説明する。

おばあさんは何度も「ありがとう」と言って頭を下げながら、目的のターミナルへ向かった。その背中を笑顔で見送り、胸を撫で下ろす。

良かった。さて、バスのチケット買わなきゃ……

そう思って振り返ろうとすると、誰かに袖口を引っ張られて、体が傾いた。

「え？」

「ママどこ？」

「……えっ!？」

引っ張られたほうに視線を向けると、泣き腫らした顔の男の子が立っていた。

「大丈夫だよ」

慌てて膝をつき声をかけたが、内心たじたじだ。

ど、どうしよう。迷子センターとかあるのかな？

「一緒にママ捜そっか」

「……うん」

「じゃあ、荷物取ってくるから待っててね」

そう言っ男の子から顔を上げて立ち上がった瞬間、ハツとする。先ほど自分が荷物を放り出した場所には何もなかった。

——え？

キョロキョロと辺りを見回しても何もない。

「ここにあった荷物知りませんか？」

「さあ、分からないわ」

近くの人に訊ねてみてもこんな返事しか返ってこない。

え？ まさか盗まれたってこと？ 本当に……？

血の気が引いていく。私が立ち尽くしていると、男の子が私の手を引っ張った。

「ねえ、ママは？」

「あ……。ちょっと待っててね」

どうしよう。

目の前には泣いている子供。背後には何もなくなってしまう空港の床が見えるのみ。冷や汗がだらだらと止まらなかった。

とりあえず、優先すべきはママを見つけてあげることよね？ 私も不安だけど、きつとこの子のほうが不安に違いない。なくなった荷物はあとで空港のスタッフにお願いをして一緒に探してもらえばいい。そう決めて、泣きたい気持ちを堪え、その子の手を握った。

「ごめんね、ママ捜そう」

「とんだお人好しだね」

手を繋いで歩き出そうとした途端、溜息混じりの流暢な日本語が聞こえてくる。その声にハッとして振り返ると、栗色の髪にブラウンの瞳の彫りの深い男性が立っていた。

キリッとして凛々しく、スーツの上からでも筋肉質だと分かる彼に一瞬で目を奪われ

てしまう。

かっこいい……！ まるで俳優さんみたい……！

私が見惚れていると、その男性はやれやれと肩を疎めて呆れた仕草をする。

「ここは日本じゃないんだ。地面に荷物を置いた時点で盗まれると思ったほうがいい」「えっ……？」

「人助けは結構だが、もう少し自分のことも考えないと、日本に帰るまでに路頭に迷っちゃうよ。君もその子のように困ったことがあるなら、助けてと人を頼っていいんだよ」そう言つて、私の頭をポンポンと撫でる。その気遣ってくれる優しい声音と言葉に、思わず涙がブワツとあふれ出した。

あ、あれ、私……！

自分が思っている以上に不安だったのか、相手は初対面だというのに向けてもらえた気遣いに堪えていたものが決壊して涙が止まらない。彼は、突然泣き出した私を見てギョッとしている。その姿を見ても涙が止まらず、私は涙を拭いながら、「ごめんなさい」と頭を下げた。

「いや、僕のほうこそすまない。きつく言いつぎたかい？」

「い、いいえ。私、とても不安で。でも泣いている子を放り出して、荷物を捜しに行くなんてできなくて……」

「荷物は部下にすぐ追いかけさせたから、心配しなくても取り返してくるだろう。それから、その子のママもこちらで捜させよう」

「え……？ あ、ありがとうございます！」

そう言って、後ろにいた部下の人に何か指示を出して、彼は恭しく私の手を取った。そしてすうりとした長身を屈め、手の甲に軽くキスを落とす。

海外では普通のことかもしれないが、そのキスで顔にポツと火がついた。

「泣かせたお詫びに、お茶でもご馳走させてくれないかな。お茶を飲んでいるうちに、君の荷物も戻ってくるだろうし」

「え？ で、でも……！」

そんなの申し訳ない。彼の申し出を受けるべきか逡巡していると、彼はウインクして名刺を渡してくれた。

「僕はテオフィロ・ミネルヴィーノ。怪しい者じゃないよ。どうか気軽にテオと呼んでほしい」

「よろしくお願いします、テオさん。私は清瀬美奈です。ミナと呼んでください」

「おお！ よろしくね、ミナ！」

自己紹介をしながら受け取った名刺に目を通すと、そこには彼の名前と勤務先のホテルの名前が書かれていた。

トリエステホテル……

そのホテルの名前を見て体がわななく。

日本にもある高級ホテルだ……！ テオさん、こんな高級ホテルで働いているの？ なんだかすごい！

「自己紹介も終わったし、ミナも僕が怪しい者じゃないって分かっただろう？ だから、お茶をご馳走させてくれないかな？」

「はい。あ！ えっと、先に予約しているホテルに遅れるって連絡してもいいですか？」

「もちろん」

私はペコリと頭を下げて、ポケットからスマートフォンを取り出した。

これだけは鞆に入れてなくて良かった。

ホッと息を吐きながら、予約しているホテルに電話をかける。

「……え？」

電話口からは予想もしていない言葉が聞こえてきて、目の前が真っ暗になった。

今、予約取れてないって言った？ いやいや、まさか。イタリア語に不慣れだから、きくと聞き間違えたんだ。そう思い、しどろもどろになりながら何度確認しても、予約が取れていないとしか聞こえない。

「う、うそ!? あ、あの……私……」

通話の途中なのに硬直していると、私の手からスッとスマートフォンが奪われる。テオさんが電話を代わってくれた。

そしてしばらく話したあと、彼は残念そうに電話を切った。

「どうやら何かのミスがあったようで予約が取れていないみたいなんだ。でも満室らしく、新しく予約を取るのは無理らしい」

「……そ、そんな」

私、ここに五泊する予定だったのに……！

これからどうすればいいの？ 出発前にもっとちゃんと確認すれば良かった……

手足が急速に冷えていく。唇をギュッと噛むと、テオさんが私の肩に手を置いた。

「そんな顔しないで、ミーナ。僕のホテルに泊まればいいよ」

「え……」

「是非この旅行を華のあるものにさせてくれないかい？ イタリアは悪いことばかりじゃないと教えてあげるよ。それに君は一人にすると、また何かをやらかしそうで心配だ。僕の心の平穏のためにも、どうか僕のホテルに来てくれないかい？ 滞在中は僕の君のバトラーになるよ。『おもてなし』をさせてほしいんだ」

え……？ え？ テオさんのホテル？ テオさんが働いているホテルって……

「無理です！ そんな高いホテルになんて泊まれません」

「僕が提案したんだから費用のことは気にしないでいい。泣かせたお詫びだと思ってくれ。ミーナ、君は今から僕のゲストだ。ゲストであるからには、先ほどのように一人で悩み解決しなくてはならないことなど何一つない」

彼は優しい。だけど、会ったばかりの人について行って大丈夫なの？ けれど、彼の提案に乗らなければ、帰りのチケットまでの期間——ミラノでどう過ごしていいかわからない。

私の語学力で新しくホテル探しなんてできるの？ それにもし今日泊まるホテルすら見つけれなかったら？

そんなことになったら着いたばかりなのに日本に帰らなきゃいけない。それだけは嫌だ。

せっかく今後の自分を変えるきっかけになればと思ってここまで来たのに……。それに憧れのイタリアの地を一步も踏まずに帰るなんてありえない。

海外で見知らぬ人の手を取る。それがどんなに危険なことか分かっている。それでも私はテオさんが悪い人だとは思えなかった。

私は葛藤しながらも自分の直感に従って、彼の提案を受け入れた。すると、彼はエスコートするかのように腕を差し出す。その腕におずおずと手を絡めると、彼がよくできた「モルトベーネ」と言って褒めてくれる。

どうしよう、なんだか思ってもみない始まりになっちゃった。
空港に着いた時は、普通の一人旅が待っていると思っていたのに……！

「ほら、もう市内に入ったよ」

「え？」

「空港から車で三十分くらいだからね。すぐだよ」

そう言って、テオさんが私の頬をつつく。

ド庶民の私でも知っているイタリアの高級車。しかも運転手つき。そんな車に乗せられ、ビビっているうちに市内へと入ったので、正直なところあつという間に感じてしまった。テオさんの言葉で視線をミラノの街並みに移すと、ほどなくして目的地のホテルが見えてくる。私は口をポカンと開けて、車の窓から見えるその五つ星ホテルを眺めた。

ここがトリエステホテル……

日本にもあるのでもろろん存在は知っていたが、自分のような庶民には一生縁がないと思っていた。まさかそこに訪れる日が来るなんて。それも宿泊できるとは、人生何が起きるか分からないものだ。私はやや複雑な心境で、テオさんの顔を見つめた。

「どうぞ」

「は、はい」

ホテルに着き車が停まると、ドアマンの男性がにこやかに車のドアを開けてくれたので、テオさんがさっと降りる。そして私に手を差し出してくれた。ゴクリと息を呑み、その手を取ると柔らかに微笑んでくれる。

なんだかお金持ちのお嬢様になったみたい。

こんな扱いを受けた経験がない私は、口から心臓が飛び出しそうなくらいドキドキしていた。車から降りると、若いポーターが飛んできて、荷物を下ろして運んでくれる。そこには私の荷物があつた。

あ！ 私の荷物！ 見つけたのね……！

荷物を見ながら立ち止まっていると、テオさんが背中をさすってくれる。

「ミーナ、荷物は約束通り取り返してきたよ。何もなくなっているとは思いますが、念のためにあとで確認しようか」

「はい。ありがとうございます」

自分の荷物が戻ってきたことに、まずは安心してホッと胸を撫で下ろす。

一人だったら、きっと今頃途方に暮れていただろう。無事に見つかって本当に良かった。これもテオさんのおかげね。

やっぱりテオさんはいい人だったのだと直感が確信に変わった。

「わあ、すごい！」

テオさんエスコートのもと、ホテルの中に入ると、思わず感嘆の声が漏れた。お行儀が悪いと思いつつも、キョロキョロしてしまう。

踏み込んだエントランスホールは広々としており、宮殿と見紛うほど豪華で美しかった。あつちを向いても、こつちを向いても煌びやかで、何かしらが金色だ。私はその美しさに目が眩みそうだった。

「なんだか緊張しちゃいます。とても素敵……！」

テオさんに手を引かれ、ふかふかの大きなソファアーに腰掛けながら、私は初めて訪れる五つ星ホテルに心が浮き立った。

置かれている椅子もテーブルも、今座っているこのソファアーも、素人目で見ても素晴らしい逸品だということが分かる。

「ミーナは可愛いね」

私が浮かっていると、テオさんがそう言って目を細めて笑う。

あ……私……はしたなかったよね。

「すみません。浮かれすぎですよね……」

「違うんだ、そんな顔しないで。気分を害したかい？ 見るものすべてに目を輝かせて

いる君はとても可愛く魅力的だと言いたかったんだ」

「……っ！」

テオさんのストレートな褒め言葉に、顔にボツと火がつく。熱くなった頬を両手で覆うと、ベルマンが目の前にウエルカムドリンクを置いてくれたので、気持ちいを落ち着かせるために一口飲んだ。

ここはイタリアよ。少しの賛辞くらいで動揺しちゃダメ。落ち着くのよ、私。……こんなふうに褒められたのは久しぶりだから、やっぱり動揺しちゃうのよね。

「あ、美味しい」

「それは良かった。ミーナ、チェックインするためにパスポートを見せてもらおうよ」

「はい」

私が頷くと、彼が私の代わりにチェックインの手続きを行なってくれる。私はそれを見ながら、ドリンクをもう一口飲んだ。

「え？ ミーナ、二十三歳なの？ てっきり、もう少し若いと思ってた」

彼は私のパスポートを見て目を瞬かせ、私とパスポートを見比べる。その意外そうなものを見る目が少し居心地悪く感じて、私は彼の視線から逃れるように俯いた。

彼には——不注意で荷物をなくし、その上泣いたところまで見られてしまっている。そりゃ年齢より幼く見られても仕方がない。彼にとっては、母親とはぐれて泣いていた

男の子と私、どちらも大して変わらないのだろう。もしかすると私のことも迷子を保護したように思っているのかもしれない。

「そ、そういうテオさんは、おいくつなんですか？」

「僕？ 僕は三十歳だよ。ミーナからすると、おじさんに見えるかな？」

「いいえ。そんなことはありません！ テオさんはとても素敵です！」

あははと笑うテオさんに力一杯首を横に振ると、彼は私の勢いに一瞬驚いた顔をした。でもすぐに「ありがとう」と微笑んでくれる。

私ったら、力むようなことじゃなかったわ。恥ずかしい。でも本当にとっても素敵なんだもん。

私は熱くなった頬を押さえた。

その後は部屋へ移動し、テオさんから設備やルームサービスについての説明を受ける。さすが、高級ホテル。部屋の中もすごい。それにベッドも大きくてふかふかだ。でも覚悟したほどゴージャスで派手ではなかったので、少しホッとした。

良かった。これなら落ち着けそう。

「ごめんね、ミーナ」

「え？」

「もつといい部屋を用意したかったんだけど、今はバカンスシーズンでこの部屋しか空いていなかったんだ」

「謝らないでください！ このお部屋もとても立派ですし、私にはもったいないくらいです。それに豪華すぎても落ち着かないので」

「そう？」

「はい！」

テオさんの言葉に力一杯頷く。

というより、バカンスシーズンに部屋が空いてただけでも奇跡だ。それにこんな素晴らしいホテルに泊まるという経験をさせてもらえるだけで、とても幸せだ。

「なら、いいんだけど。じゃあ、荷物の確認をしようか？」

テオさんは申し訳なさそうに、ページボーイが部屋まで運んでくれた荷物を私の前に差し出した。スーツケースを開き、一つずつ丁寧に確認していく。

「良かった……。全部あります」

「そう？ それは良かった。でも、もし足りないものとか出てきたら、いつでも言ってね。すぐに用意させるから」

「ありがとうございます。でも大丈夫なので、お気持ちだけ受け取らせてください」

「……ミーナ。遠慮は美德かもしれないけど、困った時はちゃんと隠さずに言うんだよ」

「はい……」

私が頷くと、彼は「モルトベエネ」と言つて、また褒めてくれる。その優しい笑顔にふにやつと笑つた。テオさんに褒めてもらえると、なんだか嬉しい。

「ミーナ、コーヒーと紅茶どっちの気分？」

照れ笑いをしながら広げた荷物を片づけていると、テオさんが問いかけてくれる。

「それは私がするので、テオさんは座っていてください」

「ダメだよ。ミーナはゲストだつて言つただろう。ほら、どっち飲みたい？」

「えっと、じゃあ紅茶で」

「OK！」

ウインクして私の申し出をスマートに躲す彼に戸惑っている間にも、彼は手際よくロイヤルミルクティーを淹れてくれる。

「さて、じゃあそろそろゆっくり過ごして」

彼はテーブルに一人分のミルクティーを置くと、そう言つて部屋を出ようとした。その言葉に私は思わず首を傾げて尋ねた。

「え？ 一緒に飲まないんですか？」

「今日は色々あつて疲れただろう？ だから、これを飲んだあとは温かいお湯に浸かつて当ホテル自慢のダイニングを楽しんで、ゆっくり休んだほうがいい。あと、それから

これはミーナへの宿題。明日行きたいところを考えておいて」

「え？ そんな……。そこまでお世話になったら悪いです……！」

「ノー、ミーナ。言つただろう。君は一人にすると何かをやらかしそうで心配だつて。

僕の心の平穩のためにもミラノを案内させてほしい」

ここまで至れり尽くせりしてもらつて、本当にいいのかしら？

「いい子だね、ゆっくりおやすみ」

ガイドブックを渡してくる彼に気圧されるように頷くと、そう言つて、私の頭を撫でて彼は部屋を出て行つた。

誰もいなくなつてしんと静まり返つた部屋で、彼が淹れてくれたミルクティーに口をつける。深いコクとやさしい香りが私を包んで、ホッと息を吐いた。

まあ私一人だと、また何か失くしそうだし迷子にもなりそうだから、任せたほうが安心なのかしら。それに現地の方に案内してもらつたほうが、色々と楽しめそう。

そうは思つても、迷惑をかけてしまったら申し訳ないわ。

「……」

私はどうしたらいいのだろうと思ひながら、ミルクティーを飲みきり、ふかふかのベッドに大の字で寝転がつた。すると、疲れからか急速に眠気が襲ってくる。

私つたらお風呂に入らなきゃいけないのに……。テオさんもお風呂に入りなさいって

言つてた。それに夕食もまだなのに……。でも今日は色々あつて疲れちゃったから、食事やお風呂は朝でも大丈夫よね。

私は言い訳をしながらも、襲ってくる眠気に従い、目を閉じた。

「んゝ、よく寝た」

私はカーテンを開けて朝日を浴びながら、伸びをした。

昨日は夕食も食わずに早々に寝てしまったせいかな、今朝は早く目が覚めた。そのおかげで、ゆっくりとお風呂に入れて気分爽快なので、早く寝て良かったのかもしれない。

そしてメイクをしながら、昨夜テオさんから出された宿題をするためにガイドブックを開く。

ミラノって、有名なのはやっぱりミラノコレクションよね。だから、古代の遺跡や中世の街並みというよりは、モードやデザインの発信地ってイメージが大きい気がするわ。……ということとはやっぱりハイブランドのブティックとかが多いのかしら。

私はそういうものには興味がないので、買い物より観光を中心にした。行き当たりばつたりの一人旅をするつもりだったから、黄金のマリア像があるミラノ大聖堂以外は

どこに行こうか、まだ考えていなかったのよね。

えっと。ミラノ大聖堂は絶対でしょ。あとは、教会にあるという『最後の晚餐』が見たいかも。

「あ、『最後の晚餐』は予約制なのか」

じゃあ、今日は無理ね。

独り言ながら、ガイドブックとにらめっこをしているとノックが聞こえた。その音に顔を上げる。

あら、テオさんかしら？

「ミーナ、おはよう。早起きだね。よく眠れたかい？」

「おはようございます、テオさん。はい、おかげさまで。朝までぐっすりでした」

「昨夜は当ホテル自慢のダイニングを楽しまなかったと聞いたけど、まさかあのあとからずっと眠っていたのかい？」

扉を開けると、案の定テオさんがにこやかに立っていた。挨拶を交^かわしながら招き入れると、彼は今日の新聞をテーブルに置き、モーニングティーを淹^いれる準備を始めてくれる。そんな彼を見ながら、えへへと笑った。

「安心したら気が抜けてしまって……」

「まあ、到着したばかりで疲れていたんだらうね。それに昨日は色々あったから仕方な

いよ。じゃあ、ミーナは今とてもお腹が空いているだろう？ 朝食会場には、フレッシュジュースもあるし、ミーナが好みそうなパンやベイストリーもあるから、これを飲んだら行ってくるという」

「はい、そうします」

頷くと、彼がいい子だねとウインクしてくれる。

とても細やかに世話を焼いてくれる彼の姿に、私の胸がトクンと高鳴った。胸の高鳴りに動揺して、はたと動きを止める。

ちよつと私つたら……。でもこれはテオさんが素敵だから……

自分の気持ちに言い訳をしても、私の胸はドキドキとけたたましい。

ついこの間失恋したばかりで、もう恋なんてこりごりだと思っていたのに、旅先で素敵な男性に出会ったからつてときめくなんてダメだわ。彼は親切なだけ！ 変な勘違いはいけないわ、美奈！

このまま好きになつてしまうのは絶対にダメだ。これでは元カレのことを節操なしと言えなくなる。

気をしっかり持つのよ、私！

私はティーカップをガシツと掴んで、浮ついた心を落ち着かせるためにモーニングティーを一気に飲み干した。それを見たテオさんが目を見開く。

「ミーナ!? そんなに急いで飲むと火傷しちゃうよ。大丈夫?」

「は、はい。そんなに熱くなかったので大丈夫です」

「……ミーナはなんとなく猫舌そうだから、温度には気をつけたんだ。それでも急いで飲むのはよくないよ」

テオさんは「良かった。飲みごろにしておいて」と胸を撫で下ろしている。でも、私は猫舌とバレていることに正直驚きが隠せない。私はテオさんの言葉に目を丸くした。

わざわざ伝えていないことまで、先読みして動いてくれるのはさすがとしか言いようがない。

バトラーつてすごい……!

「さあ、早く朝食を食べておいで。ただし、朝食はさつきみたいに急いで食べちゃダメだよ」

私が感心していると、彼はティーカップを片づけながら、揶揄うように笑う。

「はい。ゆつくり食べます……」

「そうしてくれると助かるよ。あと、ミーナ。観光に出かけている間にルームメイドを入れてもいいかい?」

「もちろんです。よろしくお願いします」

「了解」

テオさんに朝食会場まで案内してもらいながら、そう答えると、彼はウインクをして承諾してくれる。たったそれだけなのに、また私の胸はトクントクンと高鳴ってしまう。本当にどうしちゃったのよ？ 私ってば……

彼はイケメンだし、とても優しく気遣いにあふれている。だからって、旅先で会っただけの人を本気で好きになってどうするつもり？ そんなの……あとで絶対つらくなるだけだわ。

私は自分の心に戸惑いながら、テオさんと朝食会場の前で別れた。

「うう、お腹がいっぱいで苦しい……」

「ミーナ、良かった。たくさん食べられたようだね」

「はい。どれもとても美味しくて、選べませんでした」

私が好みそうなパンやペイストリーがあるとは言われていたけど、本当に好きなものがたくさんあって、ついつい食べ過ぎてしまったのだ。

昨日夕食を食べていないからって欲張りすぎたわ。恥ずかしい……。食いしんぼうだと思われたらどうしよう。

私は頬を赤らめながら、いっぱいになったお腹をさすった。すると、テオさんが昨日と同じ運転手つきの高級車へスマートにらせてくれる。

「さて、どこに行くか決めた？」

「はい。まずは定番のミラノ大聖堂に行ってみたいです」

「それはいい。大聖堂はミラノの象徴的存在でもあるし、聖母マリアに捧げられた世界最大級のコシック建築でもあるんだ。それを一番に選ぶ君は素晴らしいよ」

「そ、そうですか？」

事あるごとに褒めてくれる彼の言葉に面映ゆい気持ちになって、私は誤魔化すように笑った。そして、視線をガイドブックに落とす。

女性を褒めるのはイタリア人男性の礼儀だと聞いたことがあるけど、本当に彼は息をするように私を褒めてくれる。この褒め言葉攻撃に慣れないといけないのに、ついつい反応してしまう。私は小さくかぶりを振った。

このままずっと彼にお姫様のように扱われていたら、本当に好きになってしまいそう。彼には何でもないことなのよ。勘違いは絶対にダメ。それに恋はもういいって決めたじゃない。でも……彼が恋人だったら毎日が幸せであふれていそう。

……テオさんみたいな人が恋人だったら良かったのに……

私は俯きながら視線だけで彼を盗み見た。

「わあ！」

大聖堂に着くと、ドゥオーモ広場に面して堂々と聳え立っている建築物の正面に目を奪われた。白大理石と彫刻が美しい。

「素晴らしいですね」

「この彫刻はね、聖書の人物や聖人、預言者など、全体で約三千五百体あるんだよ。特に『テラモン』という男性の像を探してごらん。他の装飾や柱を支える役割も兼ねているから、色々な所にいるよ」

そう言って、彼が指を差す方向に視線を向ける。

確かに色々なボーズで柱を支えていて、とても遊び心があって面白い。

このテラモンさんは何体いるのかしら？

テオさんの解説を聞きながら興味深く見ていると、扉が五つあることに気づく。

「テオさん。扉がたくさんありますが、どこから中に入ればいいんですか？」

「入場口は一番右の扉だよ。でも、その前に中央扉を見よう。五つの扉の中で一番大き

いんだ」

彼はイタリアの有名な彫刻家が手掛けたレリーフがあると教えてくれた。花や果物、動物をモチーフにして聖母マリアの生涯が彫られているらしい。

「扉に向かって左側中央のレリーフが表現しているのは、天に召されたキリストを後ろで支える聖母マリアの姿だ。そして右側中央は、彼女の有名なエピソードの一つ『聖母マリアの被昇天』が彫られているよ」

「すごい……」

口を大きく開けたまま、テオさんの説明を聞きながら、そのとても大きな扉のレリーフを見つめる。もう全部が素晴らしすぎて、すごいとしか言葉が出てこない。

私がスマートフォンを取り出し、パシャリと写真を一枚撮ると、テオさんが私の手からスマートフォンを取った。

「あ！」

もしかして撮っちゃいけない場所だったのかしら。私ったら……

やってしまったという顔をした途端、彼が微笑みながら首を横に振った。

「違うよ、撮影はオッケーだよ。ただ大聖堂だけを撮るんじゃないくて、ミーナも写るといいって言いたかったんだ。撮ってあげるから、そこに立って」

「え？ で、でも……」

「ほら、遠慮しないで。少し後ろに下がろうか」
戸惑いつつも言われたとおりに後ろに下がって、中央扉の前に立つ。髪を手櫛でさつと整え、テオさんに向かってニコツと微笑んだ。

「じゃあ、撮るよ」

そう声をかけて、彼が二、三枚シャッターを切ってくれる。

「これで大丈夫？ 可愛く撮れたと思うんだけど」

「はい。ありがとうございます」

スマートフォン画面を見せてくれる彼と思わず体が触れ合って、胸がドキンと跳ねた。ほのかな甘さと男性的なセクシーな香りに、なぜかは分からないけど、ゾクゾクしてしまふ。

私ったら……！

「つ、次はテオさんと一緒に撮りたいです！」

「喜んで、ミーナ」

上擦った声で、この勢いに乗って図々しいお願いをしてみる。彼が快諾してくれたのでどさくさ紛れにテオさん一人の写真もゲットし、ご満悦でスマートフォンを抱き締めた。

嬉しい！ いい思い出になったわ！

「テオさんが撮ってくれた写真、とても綺麗に写っていてびっくりしました。写真撮るのお上手なんです」

「ノー。僕が上手なんじゃなくて、被写体がいんだよ。ミーナはとても可愛く美しい。だから、綺麗に写るのは当たり前のことだ」

「……っ！」

頬を撫でながらそう言われて、全身の血液が頬に集まったんじゃないかと思うくらい、彼が触れている場所が熱をもつ。

彼の態度に、自分がとても大切にされている錯覚に陥ってしまう。勘違いしちゃいけないのに、勘違いしそうになる。私は慌てて触れられていないほうの頬をパシーンと叩いた。それを見たテオさんがすごく驚いている。

「ミーナ？ 急にどうしたんだい？」

「いいえ。ちょっと弱い自分の心と闘うために気合を入れようと思ひまして……」

どうやら私の心は失恋を新しい恋で癒そうと思っているらしい。でも、テオさんと私はこの旅行中だけの関係だ。本気で好きになっても実らない。それにそんなの親切なテオさんにも迷惑がかかっちゃうわ。いいかげんフラフラしてないで、純粹に旅行を楽しまなきゃ！

「は？」

私の言葉にテオさんは訝^{いぶか}しげな表情で首を傾^{いぶか}げている。

「ほら、早く中に入りましょう」

そんな彼に誤魔化^{ごまか}すように笑って、私は手を引いた。

「違うよ。こっち」

「……え？」

先ほどテオさんが言った一番右の扉に並ぼうとすると、彼は私の腰に手を添えて体の向きを変える。そして、入場口には目もくれずに歩き出した。

え？ 入らないの？

私の手を引いて歩き出すテオさんに、顔を後ろに向けながら離れていく入場口を見つめた。

「あの、テオさん？ ついさっき一番右の扉が入場口だって言いませんでしたか？」

「うん、言ったよ。でも見て分かるとおり、とても混雑しているから、屋上テラス行きの入場口から入ったほうが早いんだ」

へえ、そうなんだ。私一人だったら、あそこに並んでいたかとも思いつながら、空いている手でガイドブックを開く。あ、本当だ。屋上テラス行きのほうがおすすめて書いている。エレベーターか階段か選べるのね。テオさんの後ろを歩きながらガイドブックを確認していると、突然彼が立ち止まったので、背中にぶつかってしまう。

「すまない、大丈夫かい？」

鼻を押さえながら俯くと、慌てた彼が振り返って私の顔を覗き込む。

「大丈夫です。ごめんなさい、ガイドブックを見ながら歩いてた私が悪いです」

「いや、気をつけていなかった僕が悪い。ちょっと見せて」

「……っ！」

テオさんが私の頬に手を添えて、ぶつけたところを確認する。彼の吐息を感じてしまいうくらい近くに顔が近づいてきて、私は思わず息を止めた。

その時、数人のスタッフらしき人が近づいてくる。そしてテオさんに恭^{うやうや}しく頭を下げた。

……え？ どういうこと？

「お待ちしておりました、ミネルヴィーノ様。こちらからどうぞ」

「ありがとう」

「……」

状況が理解できずにテオさんと数人のスタッフを交互に見ていると、テオさんが私の腰に手を添え、そのスタッフの案内で中へ入っていく。その光景になんとなく違和感を覚えながらも私は黙ってテオさんについていく。

「昨日、ホテルの名で予約を取っておいたんだ」

「あ……そうなんです」

私の戸惑いが分かったのか、テオさんがウインクをしてそう教えてくれた。

さすが五つ星ホテルだ。ホテルで予約を取ってもらうと、優先的に入場ができるのね。私が感激している間にも、彼はスタッフの方とにこやかに話しながらセキユリティチェックを受けて、ゲートを通る。

「でもいいんでしょうか？ 特別扱いしてもらったみたいで申し訳ないです……」

「別に構わないよ。もともと、屋上テラス行きには優先入場口と一般入場口があるんだ。だから、これは珍しいことじゃない」

でも——多分ホテルからの予約だから、誰よりも優先的に通れたのだと思う。テオさんは珍しいことじゃないと言うけれど、おそらく珍しいケースだろう。

エレベーターに乗りながら、大丈夫と笑う彼をじっとりと見つめた。そして次の瞬間、ハッとすする。

私、チケット代払ってない！

「テオさん、ごめんなさい。チケット、おいくらでしたか？」

「ん？ 知らないよ。僕が提案したんだから費用のことは気にしないでいいって言っただろう」

「でも……。ホテル代を出していただいているのに……」

「ミーナ。君は遠慮なんてせずに、目一杯楽しめばいい」

私がお財布を出すと、彼はクールに笑いながら首を横に振る。そして私の頭をポンポンと撫でた。

でもそんな……。とても申し訳ない。

テオさんは私をお人好しと言うけど、テオさんのほうが余程お人好しだと思う。出会ったばかりの私を助けてくれ、こうやって観光に連れていってくれるんだもの。災い転じて福となすとは言いが、こんなにも幸せでいいのだろうか。私、一生分の運をここで使い切ってない！

ああでも、それでもいい。これから先良いことなんてなくても、この思い出を胸に楽しく生きていけそう。そんなことを考えていると、エレベーターが屋上に着いた。

「ミーナ。ほら、着いたよ。楽しもう」

「はい」

笑顔の彼に手を引かれて屋上に出ると、一本の道が伸びていた。

わあ！ すごい！

美しい彫刻が視界に飛び込んできて、私は思わず感嘆の息を吐く。デザインが違う上に少し遊び心が加えられていて、とても興味深い。それに、何より景観が素晴らしい。

「とてもいい景色ですね。ミラノの街並みがよく見えます」

「気に入ってもらえて嬉しいよ」

テオさんが嬉しそうに微笑みながら私に腕を差し出したので、その腕に自分の手を絡めた。彼の腕を取りながら、屋上からミラノの街を眺めていると、なんだか心が浮き立ってしまふ。

まるでデートをしているみたい。そこまで考えて、私はかぶりを振った。
いけないわ、私ったら。何を考えているのかしら。

「ミーナ?」

「テオさん! こっちへ行くとテラスなんですよね? 早く行きましょう!」

私の顔を覗き込む彼の視線を振り払うように、私は掴んでいる彼の腕をぐいぐい引張る。そして順路と標識に従い、テラスへ向かった。すると、無数の尖塔が並ぶ圧巻の光景に目を奪われる。

「この尖塔は全部で百三十五本あるんだ。尖塔上部にいる彫像はすべて違うデザインなんだよ」

「それはすごいですね」

すべての彫像が、まるで外敵から大聖堂を守るように外側を向いている。そのさまに圧倒された。

この素晴らしい光景を見ていると自分がちっぽけなものに感じられ、簡単なことでテ

オさんに揺れている自分が恥ずかしくなる。このあとは気をしっかりもって、テオさんの優しさを誤解しないようにしなきゃ。

私は両方の拳を握りしめ、決意を新たにした。

「ねえ、ミーナ……」

「ひゃあつ!」

私が尖塔の彫像を見ていると、突然耳にテオさんの息がかかる。その吐息にゾクゾクしたものが体を走って飛び上がった。私、今変な声出しちゃった……!

とっさに自分の口を手で覆う私を見て、テオさんはとても驚いた顔をして、両手を上げた。

「……ミーナ、すまない。驚かせてしまったかな」

「ご、ごめんなさい。違うんです。尖塔に夢中になってしまっていて……」

その上、今で皆の注目を集めてしまったのか、周囲の視線が痛い。私が俯くと、彼が私を皆の視線から守るように腕の中に隠してくれた。

「いや、僕のほうこそ驚かせてしまってますまない。外観の装飾の中でも、一際面白いのがガーゴイルと呼ばれる排水口なんだと言いたかったんだ。天使や空想上の動物をモチーフにしているんだよ」

「そ、そうなんですわね！ わあ、すごい！」

落ち着くよ、私。お願いだから落ち着いて、私の心臓。

ガーゴイルを覗き込もうとすると、テオさんは抱きしめている腕に力を込める。そして困ったような声を出した。

「まいったな。ミーナ、可愛すぎだよ。耳まで真っ赤にして……。そんなに可愛い反応をされると、困ってしまうんだけど」

「……え？」

顔を上にあげると、彼は頬を赤らめて片手で口元を隠していた。その表情に目を見張る。

……テオさん？

彼のその表情に硬直していると、彼が突然私の鼻をぎゅむつと摘んだ。

「……っ！」

「ミーナ。そんな可愛い顔で見つめられたら、思わずキスしちゃうよ」

「……っ！」

えっ？ キス!? キスって言った？

「冗談だよ」

口をパクパクさせると、彼は意地の悪い笑みを浮かべて、私の額を指で弾く。私は額を押さえて、彼を睨んだ。

うう、押さえるなんて酷い。

「テオさんなんて、もう知りません」

「怒らないで、ミーナ」

ふいっと顔を背けて一人で歩き出すと、テオさんがそう言いながら追いかけてくる。

その声に立ち止まって頬を膨らませながら振り返ると、彼は手を伸ばして何かを指した。

「ほら、あの大尖塔を飾るのがこの大聖堂のシンボルだよ。ミーナも聖母の如き心で、今の僕を許してほしいな」

あれがガイドブックに載っていた黄金の聖母マリア像……！

私は拗ねているのも忘れて、マリア像に見入った。両手を広げて被昇天する姿が何とも神々しい。やっぱりミラノに来て良かった。自分自身の目で見える聖母マリア像は写真で見る以上に私の心を打った。

マリア様。私、出会って間もないのにテオさんに惹かれています。こんな私は節操なしでしょうか？ 私が気をしっかり持てるように、どうか見守っていてください。

胸の前で手を組み、懺悔と懇願が入り混じった訳の分からない祈りを捧げる。すると、テオさんも隣で私を真似て手を組み、こう言った。

「ミーナがイタリアを好きになってくれますように」

「テオさん……！」

「僕は君がこの旅を楽しめるように最善を尽くすと誓うよ。だから、もう怒らないで」
「最初から怒ってなんていません……」

困ったようにそう言うのと、彼がとても嬉しそうに笑う。その笑顔にまたもや心臓が大きく跳ねた。ブワツと体温が上がって、熱くなる。

マリア様、ごめんなさい！ 私、無理かもしれません。これ以上テオさんのかっこよさに抗えそうにありません！

私は黄金のマリア像を見つめながら心の中で悲鳴を上げた。

「ミーナ。足元に気をつけてね」

「ありがとうございます」

そのあとはテオさんにエスコートされながら、ひたすら階段を下りた。

下りる時はエレベーターがないので少し大変だ。でも彼と手を繋いで下りられるのが楽しくて、全然苦にならない。テオさんの気遣いにニコリと返しながら、ハアツと歓喜の溜息を吐く。

「それにしても外観も屋上も、とても素晴らしかったです。まだ中を見ていないなんて

立ち読みサンプル はここまで

嘘みたいに大満足です」

「そうだね。この大聖堂は完成まで五百年近い歳月が費やされ、多くの芸術家たちの想いと技術の粋が集まっている。それだけ素晴らしいってことかな」

彼の言葉にふむふむと頷く。

建設に、そんなに長い時間がかけているのね。当たり前だけど、当時は機械なんてないからすべてが人の手で造られているのよね。そう思うと、本当にすごい。

階段を下りきって、その先にある扉をテオさんが開けてくれる。その扉を抜けると整然と並ぶ巨大な柱と厳肅な雰囲気、心が大きく揺さぶられた。テオさんから話を聞いたからだろうか。気が遠くなるくらい長い長い歳月、彼らが懸けた想いが伝わってくるようだった。

聖堂の右側——南面のステンドグラスから差し込む明かりもなんだか厳かに感じる。それに立ち並ぶ巨大な石柱が、華やかな外観とは異なり、荘厳かつ敬虔な空気を演出していた。

「テオさん！ 早く中を見て回りましょう！」

弾む気持ちを抑えられなくて、テオさんの手をぐいぐい引っ張って、ラテン十字型の大聖堂の中を進む。すると、彼は入ってすぐ右手側にある——かつてミラノの支配者であった大司教の十字架と石棺の前に私を案内してくれる。